

私の映画史

加藤泰監督のこと

十河進 映画コラムニスト

高校生の頃、神と思う映画監督がふたりいた。『明治侠客伝 三代目襲名』の加藤泰監督と、『けんかえれじい』『東京流れ者』の鈴木清順監督である。十数年後、まさかその神々に会えるとは思ってもいなかった。ふたりを含めて憧れの十数人の映画監督に会えたのは、僕が在籍していた八ミリ専門誌「小型映画」に「監督インタビュー」という連載ページを作り、毎月、新作が公開される監督たちに取材を申し込んでいたからだ。一九八一年のことである。

新作公開の時期なら、どの監督も取材を断らない。パブリシティとして受ける。一回目は加藤泰監督の『炎のごとく』だった。続いて『影の軍団・服部半蔵』の工藤栄一監督、その後、『セーラー服と機関銃』の相米慎二監督、『泥の河』の小栗康平監督、『陽炎座』の鈴木清順監督（荒戸源次郎さんも一緒だった）などが続き、何回も取材していた大林宣彦監督（確か『ねらわれた学園』だった）以外は初めて会う人ばかりだったから、まだ二十代だった僕は緊張したものだ。

中でも一回目であり、神と仰いでいた加藤泰監督の取材のときには、かなり緊張していたと思う。加藤泰監督の数年ぶりの新作は東宝作品で、取材は日比谷の東宝会館（芸術座が入っていた）の宣伝部のあるフロアだった。その応接室でカメラマンとふたりで待っていると、セーターを着た気楽な格好で白髪に加藤泰監督が入ってきた。現場での鬼神のごとき厳しさは映画雑誌などで読んでいたが、インタビューの間ずっとニコニコとした表情で、僕の拙い質問に丁寧に答えてくれた。

今でもよく憶えているのは、『瞼の母』で中村錦之助と橋のたもとの女乞食（浪速千栄子）の長いシーンのことだ。映画を見るとわかるが、力の入る名場面である。ところが、「あのシーン、画面上の隅にマイクが写つとんですわ」と監督は京都弁で言った。身振り手振り付きである。「ただね、ここで観客がマイクに気付くようでは僕の負け。そう思うて、そのままいったんですわ」と監督は言った。

また、僕が「三代目襲名」の藤純子が鶴田浩二に桃を渡すシーン、『お竜参上』で藤純子が菅原文太にみかんを渡すシーンのことを質問すると、やおら立ち上がり「世の中には、男と女しかおらしまへんわな」と、加藤泰作品でおなじみの

男女の情感を漂わせる話をしてくれた。結局、新作『炎のごとく』の話は、あまり聞かなかった気がする。

その取材の途中、監督が「下手な八ミリ撮りますのや。親バカやから長まわしして、カメラ振りまわしましてな」と話し始めた。お嬢さんが生まれて八ミリを撮り始めたため、ほとんどホームムービーだという。「仕事とちごうて、ほんまに下手なアマチュアですわ」と、監督は笑った。その話があったので、半年後、僕は京都の監督の自宅に連載依頼の電話をかけた。

一九八二年一月号から始まった加藤泰監督の連載は見開き二ページで、僕は「ローアングルのカメラアイ」と通しタイトルを付けた。数回連載した頃に、姉妹誌「コマーション・フォト」に映画評を連載している映画評論家の山根貞男さんが「加藤泰監督が連載を受けたので驚いている」と担当者から話があった。担当者は「小型映画」を山根さんに送る手配をしたという。

山根さんと言えば、加藤泰作品を絶賛する評論家であり、加藤泰作品が公開されれば、どんな作品でもベストワンに投票する。一九八一年度のキネ旬ベストテンでも、山根さんはただひとり一位に『炎のごとく』を入れていた。

そんな頃、僕は私用で京都へいくことがあり、竜安寺を出て監督宅に「原稿あがっていれば、いただきにあがります」と電話すると、「ちようどポストに入れたとこですわ。京都にいるなら、寄ってください」と言われ、ご自宅にうかがったことがある。監督の書齋で二時間ほど、いろいろな話をした。監督は「今、山中貞雄の評伝、書いてますのや」と言った。山中監督は、加藤泰監督の叔父である。その原稿は、後にキネマ旬報社から刊行された。

一九八二年十月号をもって「小型映画」は休刊した。その半年前に月刊にした「ビデオサロン」がどんどん部数を増やしているのに反して、八ミリ専門誌はどんどん部数を減らしていたからだ。僕は雑誌が休刊になるため連載を終了していただきたい、と監督に連絡をした。監督は快く了解してくれたのだが、結局、十回の連載で中断することになり、僕には心苦しきだけが残った。

その少し後のこと、アネフランセか日仏会館で「加藤泰作品特集上映会」が開かれるのを知った。監督自身が登壇し、山根さんと対談するという。その上映会に僕は出かけ楽屋を訪ねると、山根さんと話していた監督はイスから立ち上がって走りより、「雑誌、残念なことしましたなあ」と声をかけ

てくれた。

加藤泰監督にお会いしたのは、それが最後になった。数年後、新聞の訃報で「遺言により葬儀は行わず、工藤栄一監督、山根貞男氏らが見送った」と報じられた。僕は大きな喪失感を味わったが、その作品にはいつでも会えるのだと言い聞かせた。

それからずいぶん経って、「小型映画」休刊時の編集長だった上司から「山根さんに頼まれて、加藤泰監督の連載、掲載時の画像含めて出すことにした」と言われた。筑摩書房のリユミエール叢書の一冊としてまとめるのだという。

掲載した画像には、僕が加藤泰監督から預かった藁半紙に書かれた伊藤太輔監督の『王将』（助監督を務めたがクレジットは加藤泰通になっている）の絵コンテも入っていた。年月が経ち（何しろ一九四八年の作品だ）、触れるだけで崩れてしまいそうだった藁半紙を複写するのに苦労したことを思い出した。

その本は、今ではちくま文庫で「加藤泰、映画を語る」として出ている。連載当時のまま「ローアングルのカメラライ」のタイトルで、毎回の見出しが並んでいる。その見出しも、文中の小見出しも、画像や挿し絵につけたキャプション

も、若き日の僕が書いたものだ。何だか、申し訳ない感じがしている。



自己紹介のよつななもの

伊藤有紀 映画監督

初めまして、三重県の最北端、多度町出身の映画監督、伊藤有紀と申します。

これまでに二本の長編ドキュメンタリー映画を監督し、全国のミニシアターで劇場公開させていただきました。一作目『まちや紳士録』は、福岡県八女市の中心部にある白壁の古い町並みに妻と移住し、その町の一年を撮影したものです。

二作目『人情噺の福団治』は、大阪のベテラン落語家、桂福団治さんを追いかけたもので、どちらも東京のグループ現代という制作会社と組んで作りました（グループ現代は約五十年前、農薬問題を扱ったドキュメンタリーの自主制作・自主上映から始まった会社で、今ではNHK『美の壺』等のテレビ番組を制作していますが、創業の志を忘れないため年に一本はお金になりにくい長編ドキュメンタリー映画を作り続けています）。

映画は十歳から観ていて、四日市の弥生館・スカラ座、中映、ベガ・スピカ・リゲルに通いました。海星高校から日本大学芸術学部映画学科監督コースに進学。修士も入れて六年通い、大学院では高畑勲さんの授業を一年間受講。

同級生に映画史・時代劇研究家の春日太一君がいました。

学校を出てからはフリーの助監督・制作進行として、東映の教育映画出身の太田実監督による医療ドラマ（出演は光石研さん他）、地域と連携し映画作りを行っていた林弘樹監督の諸作品（出演は峰岸徹さん他）に参加。プロの厳しさに打ちのめされ、アダルトビデオ制作会社（『監督失格』の平野勝之監督が所属していた会社でした）のAD等を経てディレクターとして独立。スカパーの旅番組ロケで二年三ヶ月かけて日本を一周する中で、博多の方と縁ができて、番組終了とともに福岡県に移住し今に至る…。

映画を好きになり、映画を学び、プロに打ちのめされ、映画を離れ、旅をし、気付いたら映画に戻ってきていた（それもドキュメンタリーで）という、自分でも何だかよくわからない映画人生ですが、こうなったら死ぬまで映画から離れるつもりはありません。

次の作品は劇映画で、来年中の三重県での撮影を念頭に企画を進めています。有形無形問わず応援いただける方、ただ興味があるという方も、お気軽にご連絡ください。

好きな映画はありすぎて書ききれないので、また改めて寄稿させていただきます。

090(9396)5038 info@officearigato.com